



発行日 = 2007年6月25日 発行人 = 面出 薫 編集 = 田沼 彩子・矢野 大輔・小川 祐樹
照明探偵団・事務局 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-28-10 ライティングプランナーズ アソシエーツ内 (田沼 彩子)
TEL : 03-5469-1022 FAX : 03-5469-1023 e-mail : office@shomei-tanteidan.org http://www.shomei-tanteidan.org

照明探偵団通信

vol.28 Shomei Tanteidan Tsu-shin

海外調査レポート1

バンコク / タイ

カオスワールド・バンコクに紛れて

(2/27-3/2)

海外調査レポート2

香港

100万ドルの夜景都市「香港」

(3/14-17)

国内調査レポート

東京

キャピタル「丸の内」

シンボル「東京タワー」

(3/20)

照明探偵団倶楽部活動1

第31回照明探偵団街歩き

多要素のコンパクトなポートタウン豊洲

(2/16)

照明探偵団倶楽部活動2

第34回研究会サロン

@ヤマギワリビナスペーススタジオ

(3/5)



東京タワー

カオスワールド・バンコクに紛れて

2007.2.27-3.2

田中 智香+上田 夏子

目まぐるしい変化を続ける都市バンコク。以前行った東京・神田川の調査では、川に対して背を向けたビルが都会の闇をつくり出していたが、チャオプラヤー川の川辺には、対照的なオモテの景色がありました。ビルの屋上にオープンエアのレストランやバーが並び、眼下には混沌とした大都会が広がります。

バンコクで急速に発展が進んでいることを聞きつけ、照明探偵団は調査に向かいました。2月末の東京を出国した時にはコートが必要でしたが、6時間のフライトを経てスワンナプーム新国際空港に到着すると、熱風とアジア独特の匂いが私たちを迎えました。バンコクは発展途上にある都市ではありますが、目新しいものが生まれつつもまだまだ街中に混沌とした風景が溢れています。ここがまた進化を続けることでどこにでもあるような洗練され整い過ぎてしまう様子を想像して、それではどこかつまらなくなってしまうのではないかと少し不安を抱きました。しかしながら、昔からの神秘的なワットアルンの夕景や剥き出しの蛍光灯を点けた店頭の人々が群がるナイトマーケット、多種多様な船が行き来するチャオプラヤー川は、どこもかしこも熱気に溢れていました。



川沿いの通りにて。蛍光灯のイルミネーション



ゴーゴーバーが立ち並ぶパッポン通り



大型商業施設 サイアム・パラゴン

■サイアムパラゴン

2006年11月にオープンした大規模商業複合施設です。バンコクの中心に位置し、BTSのサーヤム駅前にあります。エントランスにはバンコクではまだめずらしいメタルハイドランプの光が洗練された雰囲気を出していました。また夜には、LEDがJEWELと呼ばれるエントランスのガラスBOXを千変万化に表情を変えていました。バンコクの最先端スポットですが、木々のライトアップ用のスポットライトが無造作に転がっていたり、LEDの石割りのシールが汚かったり、施工には未熟な部分が多く見受けられました。

■屋外レストラン シロッコ

東京タワーの特別展望台とほぼ同じ高さ、地上246Mにある屋外レストラン“シロッコ”。東京タワーのような展望台では、ガラスに映りこむ照明器具の光源や、汚れが夜景を台無しにすることがあります。このレストランのように1m程の手摺があるだけで、ガラスが有る所と比較すると夜景がまるで違って見えました。

バンコクの夜景は中心地に開発中のカラフルな看板を付けたビルがあります。川沿いには大型のリゾートホテルがあります。また、点々と白い水銀灯のあかりがあります。道路にはバンコクの交通事情を象徴するかのよう狭く並んだ車のヘッドライトが目立ちます。

晴れた日の夕暮れ時に訪れ、都会が夕闇に包まれていく様子を眺めながらお酒を片手に食事されることをオススメします。



シロッコよりバンコク中心部を眺める



地上246mの屋外レストラン・シロッコで食事をする人々

■水辺の光

暁の寺・ワットアルンの夕景は、いつ見ても神秘的です。

水辺に面してホテルやレストランの玄関となる専用船着場が設けられ、ボートが行き来しています。夕暮れが近くなると少し暑さが引いて、涼しい風を受けて、川面に映り込む街灯りを眺めることができます。光源は白熱灯や蛍光灯といった安価なもので、新しい光を垣間見ることはあまり出来ませんが、白熱の点光源のあかりが川面に増幅し揺れ動く様子がお洒落です。

■スワンナプーム新国際空港

世界で一番広いスワンナプーム新国際空港は2006年9月に全面開港しました。設計は、ドイツのソニーセンターを手がけたヘルムート・ヤーン氏です。政治的な予算の問題もあったと聞きましたが・・・エントランスのブルーのライン照明に色気を感じるほかは、ただ広く無機質で冷たい空間が続くばかりといった印象でした。



ブルーがアクセントのスワンナプーム新国際空港



シーロム通りのナイトマーケット

■ミレニアム・ヒルトン・バンコク

2006年5月にオープンしたタイでは20年ぶりの大型ホテルで客室全543室がリバービューになっています。UFOのような円盤を頭に載せ、クールモダンな風貌でそびえ立っています。ロビーに入り、見上げると随分と高く感じられる吹き抜けがあり、ガラスブロックの窓から入り込む自然光が、廊下の表情を豊かにしています。チャオプラヤー川沿いの従来のリゾートホテルの多くは、外観をナトリウム灯のオレンジの光でドカーンとライトアップしているのです。その中でミレニアム・ヒルトン・バンコクのファサードの青白い光が、ひとときモダンな印象を与えています。

■シーロム通り・ナイトマーケット

剥き出しの蛍光灯がシーロム通りを埋め尽くすナイトマーケット。どこから蛍光灯の電気は供給されているの？お店の裏側のケーブルを辿ると、延長の繰り返しでどこまでも続きます。なかにはプラスチックボトルを使って防水仕様になっている箇所もありました。

約500mの通りには所狭しと露店が並び、その小さなお店全てに40Wの蛍光灯が2本ずつは取り付けられています。電気容量を計算すると凄まじいものがあります。中には公衆電話や店先に取り付けられた分電盤から供給されているところもありました。

最新のレストランやホテル・洗練された商業施設が続々とオープンする中で、シーロム通り脇のナイトマーケットや歓楽街・パッポン通りの熱気に出会いました。

(上田夏子)



ミレニアム・ヒルトン・バンコクのロビー吹き抜け



水辺にそびえ立つミレニアム・ヒルトン・バンコク

100万ドルの夜景都市「香港」

2007.3.14-17

永田 恵美子+永津 努

■ 100万ドルの夜景

香港の夜景といえば、なんといっても九龍側から眺める100万ドルの夜景である。中でも夜の8時から30分ほど行われている。レーザーショーは見ものだ！という評判がある中、今回初めて香港を訪れる私としては半信半疑だった。「どうせ下品にキラキラ光っているだけだろう」と思ってカメラとビデオカメラをセットし、その時刻が訪れるのをじっと待った。(永田団員は高台にあるビクトリアピークから、永津団員は九龍側から香港島の夜景撮影を行った。)

日も暮れ始め、ブルーモメントがやってくるぞと思いきや、その日はあいにくの曇り空。ブルーモメントを感じる間も無く日が暮れていく中、シャッター

1997年7月1日に香港が中華人民共和国に返還され、アジア通貨危機の影響で不動産価格は大暴落し、貿易中継基地としての役割も減り、失業率は上昇し、さらに2003年にはSARS問題で観光客は激減した。経済が大打撃を受けた後、2005年9月に香港ディズニーランドがオープンしたのをきっかけに九龍駅周辺など様々な区域で開発が現在進行中である。様々な歴史的背景を経て、現在開発に力を置いている都市照明を調査するために、私たちは香港を訪れた。

を押し続ける。霧がかかった景色の中からじんわりと浮かび上がってくるネオンサイン、看板照明、オフィスの室内照明が見えてくる。太陽が完全に沈み辺りが暗くなると、看板以外の外観照明が浮き上がってきた。勝手にしていたイメージに比べると、霧がかかった中で見たせいか写真で見るとより意外とキラキラしていない印象を受けた。それは光の層として見えてくるのではなく、手前に固まっている光の中、LEDによるカラーライトが夜景にアクセントを与えているからかもしれない。しかし、デザインをするのであれば、ここまでカラフルに色を使わずして演出して欲しいと思った。



100万ドルの夜景 Bank of China Tower 周辺



Two International Finance Center 周辺

8時になり、海岸沿いではスピーカーでレーザーショーのアナウンスが流れ始めた。さあ始まるぞと、辺りには観光客が今か今かと待ち構えている。いっせいに各ビルの屋上からサーチライトやレーザーが点灯し始めた。サンハンカイセンターから東のザ・センターまで、21棟の参加ビルがアナウンス紹介に答えるかのように光の演出が始まった。その後、様々な音楽にあわせ演出が行われた。数年前までは香港島のみやっていたようだが、

現在では九龍側も行っている。観察地点としては香港島側で眺めることをお勧めする。

香港全体を盛り上げるためとは言え、国と民間が協力してこうしたショーを行うのは大変なことであり、そうしたことが成り立つこと自体が香港の魅力といえるのではないだろうか。



香港のビジネス街 中環



昔ながらの庶民の町 油麻地

■ビジネス中心部 中環 VS 昔ながらの庶民の中心部 油麻地

二車線ありトラムが街中を駆け巡るのは、香港島のメインストリート Des Voeux Rd. Central。香港はイギリスの配下にあった為、たくさんのロンドンバスが街中を走っている。ビジネス街ということもあって夜は落ち着いて人もさほど多くはいなかった。飛び出している看板もちらほらあるが、ファサード照明も全体的にギラギラしたものが少なく落ち着いている。一方昔ながらの庶民の町油麻地は道路も三車線あり、多くの人が夜の香港を楽しんでいた。中環に比べると看板照明がとても多く、ビルの三層までは商業になっているところがほとんどで、ファサードも客を呼び込むための看板と化してLED やネオンがギラギラと眩しい。その光景はテレ

ビでよく見るいわゆる香港のイメージそのままだ。看板照明の中には投光器が上の住宅の階層まで届いており、市民の生活を脅かしている。(ように見えたが、当の住人たちはさほど気にはしていないのかもしれない。) この二つの街では道路照明は約15mのポール灯でまかなっており、歩道照明に限っては各ビルの軒下からのダウンライトで確保されている。これは香港全体の共通点のようでもあった。例えば東京ならば道路はもちろんのこと歩道など公共のものは都や区が管理していることが多いので、各ビルが歩道の照度を確保する必要はほとんどない。レーザーショーでも感じたことだが、香港は民間企業と政府が協力的な印象を受けた。

■世界遺産とカジノの国マカオ

マカオへは香港からフェリーに乗って1時間半ほどで到着した。1999年12月20日にポルトガルから中国へ返還された都市だ。マカオといったらカジノ。LEDがふんだんに使われ、これでもかと言うくらい主張してくる光が多く使われている。カジノであるがために何でもあり、といった印象を受ける。とにかく派手でさえあれば良い。娯楽と快楽が混沌と混ざり合った光だけがそこにはあった。中でも印象的だったのがGRAND LISBOA。なぜこの建築が許可されたのか不思議なくらい装飾的な建築だ。上部はまだ完成されてはいないが、下層部のドームは完成されてカジノがオープンしている。ファサードにはLEDが付けられていて、約10分間の派手なムービーが繰り返し流されている。マカオタワーから眺めてもこの区域が一番眩しく、周囲に極彩色を放っていた。一方その奥にある世界遺産のひとつ聖ポール天主堂跡は、比較的抑えられた光で夜の闇に浮かび上がっている。メタルハライドランプで前面をフラットに照らし、ファサード前の広場もついでに照らしているといった様子だ。大雑把に照らしているせいで、せっかくの彫刻などが平面的に見えてしまっている。細部を丁寧に照らしてあげれば、全体の中で建築の特徴が際立ち、リズムの良い空間が生まれたのではないのかという印象を受けた。

中心部から少し離れた場所にマカオのシンボルともいえるマカオタワーがある。ここはまだ開発途中にあり、タワー横には今後住宅などが建つ予定である。タワーは大きく地上四箇所から白色でライトアップされており、照明器具が取り付けられている物も一つのオブジェとなっているので、自然で綺麗に照らされている。その横にあるタイパと結ぶ橋も丁寧に電球色で照らされ、海辺に浮かぶ一本の光の線としてエレガントな印象を受けた。タワーと橋をひとつの組み合わせとした夜景は、マカオの夜を代表する景色だと言えるだろう。

(永津努)



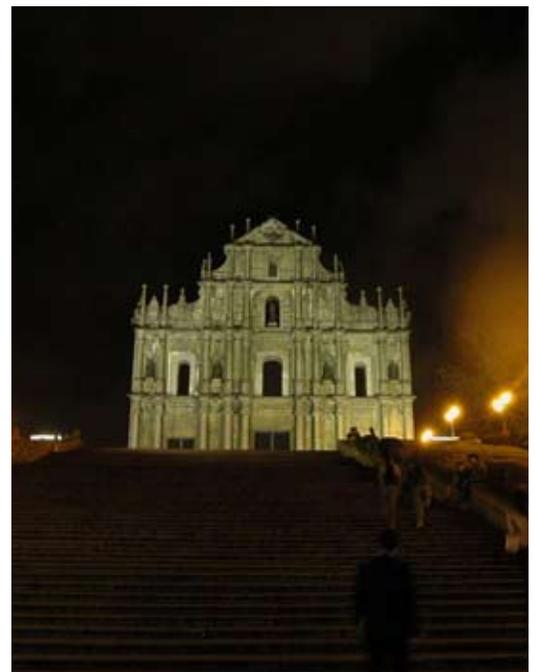
LEDをふんだんに使ったカジノ GRAND LISBOA



ポルトガル調の建物が連なるマカオの中心部



マカオのシンボル、マカオタワー



世界遺産聖ポール天主堂跡